
君に描く物語

在原 繫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に描く物語

【Nコード】

N9438N

【作者名】

在原 繋

【あらすじ】

夢見がちな奴だと人は僕に呆れるだろう。

けれど僕はそうやって現実を向いていられるほど、強くは無い。

そんなある日に突如『彼女達』が現れた。

そこから始まった僕と君とあの子の世界が僕の世界を変えた。

そして僕と君が描いたあの子の世界の物語。

はじまりの話

人気のない小道を歩いていて、それは唐突に起こった。

僕の身体が、特に腕が猛烈な重力をもって僕に負荷をかけたのだ。

「ぐあっ！！重っ」

勘違いしている奴に言っておくが断じてこれは僕の足元にブラックホールが出来たわけではない。というか、一瞬の出来事で僕にも理解出来ない。何かが僕の腕の中に落ちてきたという事実を理解したのは、僕が下に目線を落としてからだった。

少し不機嫌そうに瞳を歪めた少女が僕の腕の中にすっぽりと収まっていた。

「……………は？」

「失礼ですね。みてのとーりのか弱い女の子なんですよ？重いとか失礼じゃありませんか。」

状況の理解出来ない僕は不機嫌さを隠そうともしないその少女に圧倒されたまま固まっている。生ぬるい汗が一筋、僕の頬を撫でた。

（おんなのこがそらからふってきただああああ！！！？）

イヤ、有り得ない。有り得ない。だって有り得ないだろう、どこのラピ。タだ。僕は生憎そこまで夢を見続ける程の子供じゃあない。けれど、実際この女の子は空から降ってきたわけで――

「お生憎様ですが私は空から降ってきたファンタジー少女じゃありませんよ。その建物から飛び降りてきました。」

女の子の白い指が、小道脇に経つ白い建物を指差し、彼女はその指をくちびるに押し当てた。

「内緒ですからね？」

「…建物から飛び降りてきたっただけでも僕には驚きなんだけど、君建物が出る時はちゃんとドアってところからでないといけないの知ってる？」

「何言ってるんですか、そんなの当たり前です。第一入る時はちゃんとドアから堂々と入りました。…あ、降ろして下さい。」

何も誇るところではないだろうに彼女は何故か自慢げに話す。全く理解出来ないまま、僕は彼女に言われるがまま彼女を降ろした。

そして彼女は先程飛び降りたらしい建物の方を向いた。その時僕はその建物が病院であることに気付く。(え、コレやばいんじゃない？)隣の彼女を見ると彼女は何でもなさそうな顔をして、上を見上げた。両手をメガホンのようにして病棟の何処かに向かって、その凜とした声を張り上げる。

「だいじょーぶですよー！……！どうぞきてくださーい！」
「…は？」

彼女の奇行にはて、と首を傾げる。そんな僕の様子に気付いたのか彼女は黒いワンピースをひらりと翻してこちらを見上げた。

「もうひとり、落ちてきます。受け止めてあげて下さい。」

「………は？」

上の方で、からりと窓をあけるような音がして、僕は視線をそちらに移す。

結構高い所にある病室の窓を人影が乗り上げようとしているのが見えた。そこで、目の前の彼女が言わんとしていたことを理解した。

「は？え？…マジで？」

「マジで。」

何故か親指を真顔で突き立てられる。

(てかなんで僕がこんな脱獄紛いの奇行手伝わなきゃー)

「あ、落ちてきますよ。」

彼女が呑気に指を指す。文字通り再び、人が僕の上から降ってきた。

「
うわぁ
!」

再び、重力が僕を襲った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9438n/>

君に描く物語

2010年10月10日18時13分発行